

第1部 朱鎔基首相の登場と今後の政治動向

東洋学園大学 教授 朱建栄氏

第2部 朱鎔基首相の三大改革と中国元の動向

三井物産貿易経済研究所 主任研究員 沈才彬氏

(第1部) 従来の量的拡大が第1位で質的拡大は二の次という政策の矛盾が、自由主義経済の導入によって一気に噴出した。この矛盾を大胆に改革実行出来る人として、朱鎔基が圧倒的多数で選出され、首相として登場してきた。

彼の政策の基本は「急がない」ということだ。市場経済への転換は、全身の血液を入れ替えるようなもので、ゆっくりと時間をかけて点滴すべきだ、というものである。

過去を引き継いだ朱鎔基の目指している最も重要な変革は、構造的変革である。構造的という意味は、一つ一つの政策を連係なしに行なうのではなく、目指している三大改革—国有企业改革、行政改革、金融改革—を相互に連係させながら行なうという意味である。朱鎔基が改革を3年間でやると言い切った背景を分析すると、彼の権力闘争に対するしたたかな計算が見られる。3年後、彼は野に下る。

実は最高指導者の定年を最近75才と決めた。すると、2002年には主要な党幹部はほとんどが定年で退任する。それまでの間、朱鎔基は野にあって大局を見定めようという腹だ。そして、次の国家主席を選任する頃は、江沢民の個人的な好みでは後任を決められず、必ず実力主義に変わっているだろうという深い読みが感じられる。そして朱鎔基が勝つ。

以上が私個人の分析による、朱鎔基の政治的な意味である。

(第2部) 中国人の朝の挨拶は「食事は済みましたか？」という意味を表わした。ところが、最近は「タイタニックを見ましたか？」に変わった。冰山を、失業・金融機関の不良資産・国営企業の経営失敗・行政機関の肥大化と見立て、これに激突しないように船長が陣頭指揮をとり、結果が悪ければ責任をとるということを世界に向かって宣言した。

公表された失業率は3.1%だが、実態は更に厳しい。人に関する過去のキーワードは、下放(シアファン、60年代) — 下郷(シアシエン、70年代) — 下海(シアハイ、80年代) — 下崗(シアカン、90年代) と変わってきた。

朱鎔基は、先に述べた3大改革を実行するに当たり、前提として人員整理と同時に「安心して失業できる社会システム」と「再就職システム」を打ち出した。

中国元の切り下げは、行なわないと言っている。しかし、GDP成長率が8%を切り、輸出伸び率が-10%を下回り、直接投資(外資)が100億ドルを切るようなことがあったら注意を要する。これが限界だと見ている。